麻糸を使った加工品

古市で作られた麻糸は、衣服・麻縄・麻袋・畳縁など生活の中で使うさまざまな物に加工されました。特に品質の良い糸は漁に使う釣り糸や網に加工され、西日本一帯で使われていました。

網や釣糸を扱う店の様子　「広島諸商仕入買物案内記并二名所しらべ　全」より　明治16年(1883)　当館蔵

また、広島市は有数の蚊帳の生産地でした。蚊帳は夏に蚊やその他の小虫の侵入を防ぐために室内に吊り提げて使う布で、主に寝る時に使われます。かつてはその多くは麻製でした。

麻糸になるまでの工程

アラソ

麻の茎からはがした皮を乾燥させたもの

写真：個人蔵

コギソ

アラソから余分なものを取り除き、繊維だけにしたもの

当館蔵

ウミソ

コギソを細かく裂いて、繋ぎあわせたもの

当館蔵

麻糸

ウミソに撚りをかけて仕上げたもの

当館蔵

学習の手引き

第33号

広島の麻づくり

干された麻（コギソ）　昭和20年代撮影　写真：個人蔵

広島市郷土資料館

〒734-0015 広島市南区宇品御幸二丁目6番20号
☎(082)253-6771 / FAX(082)253-6772

麻とは

「麻」は強くて長い繊維がとれる植物のことで、全部で20種近くあります。夏物の衣料品や寝装具の素材として人気がある苧麻（ラミー）や亜麻（リネン）、麻袋や縄に加工される黄麻（ジュート）やマニラ麻などが良く知られています。

しかし、本来日本で麻と呼ばれていたのは「大麻」という植物とその繊維のことでした。昭和23年（1948）の大麻取締法により今は栽培が禁止されていますが、かつてその繊維は、庶民の衣服の生地や縄などの材料として人々の身近な存在で、広島は有数の生産地として知られていました。

麻から繊維をつくる

では、昔はどのようにして麻から繊維を取り出していたのでしょうか？　近代以降に広島で行われていた方法を見てみましょう。

麻の繊維は長さが３ｍほどになる茎の皮の中にあるので、まず皮をはがさなくてはなりません。麻の栽培をする人は、収穫が終わるとすぐに茎を煮たり蒸したりして皮をはがしました。この皮はアラソ（荒苧）といいます。

皮の中の繊維同士は接着剤のような役割をしているペクチンという物質でくっついているので、次にそれを取り除く必要があります。その作業は「ニコギ（煮扱ぎ）」と呼ばれ、煮扱屋とよばれる専門の業者が行いました。ニコギがさかんに行われていた安佐南区古市には、最盛期の大正時代に50軒ほどの煮扱屋がありました。

煮扱屋はまず大きな釜に灰汁（木の灰を水に漬けて作った汁）を入れ、アラソを煮ます。それからよく煮たアラソを川に運び、川の流れを利用して、余分なものを箸で挟んでこそぎ落としていきます。この作業はオコギ（苧扱ぎ）と呼ばれ、できた繊維はコギソ（扱苧）といいます。古市はコギソの日本有数の生産地でした。

オコギの様子　昭和20年代撮影　写真：個人蔵

糸をつくる

麻の繊維は数メートルありますが、この長さでは糸としては使えないので、各々の繊維を手作業でつないで長くしなくてはなりません。この作業を「オウミ（苧績み）」、作業を行う人を「ウミコ」、できる繊維を「ウミソ（績苧）」といいます。ウミコは注文に応じてコギソを適当な太さに裂いてつないでいきます。

オウミの様子　昭和59年（1984）撮影　写真：当館蔵

この後、つながれた繊維に撚りがかけられ、糸に仕上げられます。糸の使い道にしたがって、撚りをかける方向や強さを変えました。強い糸を作る時には、出来た糸を数本合わせて、さらに撚りをかけることもありました。